

「いただきます論争」!?

by 新参者

赴任して3ヶ月・・・

松阪食肉衛生検査所（食）に赴任してあっという間に3ヶ月が過ぎました。業務にはだいぶ慣れてきましたが、まだまだ分からないことも多く、検査所の皆さんにはご迷惑をおかけする日々です。(๐๐๐)

ここ松食では、開かれたと畜場を目指して見学を受け入れています。見学担当の一員となった私は、その重責に少々プレッシャーを感じつつも、先月初めて見学のお手伝いをさせて頂きました。先輩検査員や公社職員の方が見学者の方々に対し、衛生対策や解体作業について丁寧にそして興味を誘うように説明される姿に感心させられました。「松阪牛」が「松阪肉」になる過程を十分に理解し、納得したようでした。

見学者の方々は見学を通して「食肉の衛生的な取り扱い」を理解されるだけでなく、「牛や豚の命をいただくこと」や「解体作業をされている職員の方々のご苦勞」などに気づかれ、感謝の気持ちも届いているようです。

「いただきます論争」とは？

「命をいただく」から「いただきます」と言うわけですが、この「いただきます」に関して1年半ほど前、ある論争が起こっていたようです。事の発端は永六輔さんのラジオ番組で、ある投稿が紹介されたことでした。永さんは「びっくりする手紙です」と言って紹介したそうです。

ある母親が学校に次のような申し入れをした。『給食の時間にうちの子には「いただきます」と言わせないで欲しい。きちんと給食費を払っているから、言わなくても良いではないか。』

もちろん大多数の人は「いただきます」と言うべきであると反論したようですが、一部にはその母親と同じ意見だった人もいたようです。

「いただきます」が生まれたわけ

この「いただきます」にあたる表現は英語にはありません（ちなみにフランス語・ドイツ語にも無いようです）。以前アメリカに行ったとき、食事の前に手を合わせて「いただきます」と言うと、アメリカ人の知人に不思議そうな顔で見られたことを思い出します。

キリスト教文化圏である欧米では、家畜は神から人間に与えられたもので、人間以外の生き物は魂を持たないとされています。食事の際、神様に感謝の祈りを捧げることはあっても、食べ物自体に感謝をすることはあまりないようです。

それに対し我々日本人は、古来より神道において全ての物には靈魂が宿ると信じていました。また、飛鳥時代に伝来した仏教により輪廻転生（全ての生き物は死んでも生まれ変わる）という思想がもたらされ、「一寸の虫にも五分の魂」という諺にもあるように、動物や草や木や虫に至るまでも平等に命があり魂があるという考えが浸透していきました。

そのような文化的背景から自ずと食べ物に対する感謝の言葉である「いただきます」が生まれたのでしょ

生きている者は他の生き物の命をいただかなくては生きることができません。「いただきます論争」の母親が松食の見学に来たら、どんな感想を持たれるのか？きっと「いただきます」の本当の意味を理解してくれると私は思います。